義弟・澤田英史を悼む

京都女子大学名誉教授　檀上　寛

親友であり義理の弟でもあった澤田英史が亡くなって、間もなく一年になる。ともに京都で学生時代を過ごした一九七〇年代初頭、全国の大学には学生運動の嵐が吹きすさび、我々の大学も授業など行える状況ではなかった。

そんななかで、文学に情熱を注いだ澤田は学生運動から一歩距離を置き、小説、童話、詩などを創作しては同人誌に掲載していた。だが、そのどれもが彼にはしっくり来なかったようだ。

彼が短歌創作というおのれの天職に出会うのは、大学を卒業してずいぶん経ってからである。親友の交通事故死に衝撃を受けた彼は、このときの思いをのちに一首にしたためた。

いずれまたあたためるべき思い出を友は突然もち去りて逝く

この歌が朝日歌壇に入選したのを機に彼は創作活動に本腰を入れ、次々と清新な作品を発表していった。やがてそれらは歌集『異客』へと結実し、角川短歌賞を受賞したのは知られるとおりである。

受賞直後、彼は副賞のおすそ分けだといって、義理の兄貴の家族にまで赤いポチ袋を配ってくれた。こんなことならもっと色んな賞をとって、分け前をくれよと冗談めかして言ったのが、つい昨日のようである。今となってはそれも叶わぬ夢ではあるが。

澤田は若いころから決して身体の丈夫な方ではなく、卒業時に一旦決まった新聞社への入社も、健康上の理由から辞退したほどであった。特に十七年前に透析を始めてからはずっと闘病生活を送り、そこに脳出血や骨粗鬆症による骨折も加わり行動もままならぬ身となった。

病床に臥せった最晩年、創作活動こそ中断していたものの、それでも短歌への情熱を失うことはなかった。いくつもの新聞紙上で短歌の選者をしながら、いずれ自分自身も創作活動を再開するつもりでいた。その矢先の突然の死である。無念であったに違いない。

生前、彼のふるさとの兵庫県生野町の市川のほとりに、澤田を顕彰する歌碑が建てられた。彼はこのとき請われて、高校時代まで育った山国生野の四季を思い出しながら、情景的な一首を詠み上げた。

あがさとははるはなさき夏しげりあきはもみぢに冬はゆきつむ

生野をこよなく愛した澤田は、今は生野の地に眠っている。久しぶりの生野で、彼はふるさとの四季を満喫しているだろうか。